

平成二十九年読書感想文 校内コンクール入選作品

自由応募の部（最優秀賞）

『地元愛』

一年八組 伊藤 ほんの香

私が生まれ育った場所は東栄町。三年ほど前に、町で初めてファミリーマートが設立された際には、町民の誰もが高揚感を覚えたほどの田舎町である。そして、極楽温泉町のように、人口減と少子高齢化の問題に直面している。しかし、私は芳樹と同様に地元であるこの町が好きだ。生活面、交通面では確かに不便な部分もあるが、三百六十度山に囲まれ、草木や花が生い茂り、様々な動物が暮らしている東栄町は、愛惜すべき私の故郷なのである。現在、地元から離れた地域に下宿をして生活を送っている私は、東栄町の川の流れや匂いとか、夕暮れ時の、なんとも言えない気持ちにさせられる夕日の色とひぐらしの声

たまらなく恋しい。この小説を読んでから、この感情はいつそう強いものになった。

私は、小学校のときに「閉校」というものを経験した。三年生に進級すると同時に、それまで私が通っていた東部小学校ともう一つの学校が、東栄小学校に吸収され、とうとう町内の小学校が一つになってしまったのだ。当時、まだ幼かった私は、一口に「閉校」と言われなくてもよく理解することができなかつたが、「閉校」とは、悲しくつらいものだということをしかと学んだ。故に、高校生になった今となれば、『大人たちは、数字だけで極楽高校を切り捨てようとしている。定員数や進学率とか単なる数字で、使

古した道具みたいにな、ポイ捨てしようとしている。』という芳樹の言い分に強く共感できる。私が二年間お世話になった東部小学校は、本当に素晴らしい学校だった。通っていた生徒、勤めていた先生方の誰もがそう確言する。私たちが東部小学校を慈しむ気持ちは、数字に負けてしまったのだろうか。そう考えると、合併することの利点や少子化問題云々のことなど忘れ、未だに悔しさがこみ上げてくる。

極楽温泉町の町長・谷山栄一氏と、その秘書であり、芳樹の兄でもある香山和樹は、町の再興と谷山氏の選挙再選を懸けて、「世界の大都市に負けないマラソン大会」の開催を画策する。なんと、賞金総額五〇〇万円。それも、町長が私財をなげうって全額負担したのである。また、某テレビ局とマラソン大会のドキュメンタリーを撮る約束をし、ゲストランナーには人気女優。小さな町が大胆な策に打って出ること、全国から注

目を浴びた極楽温泉町は知名度を上げ、町のために身銭を切った町長の好感度もちゃっかり上げて、再選を狙おうという目論見である。陸上部に所属している芳樹は、親友の久喜、健吾と共に「チームF」を結成し、四二・一九五キロのフルマラソンに挑む。賞金のため、仲間のため、そして町おこしのために。

東栄町には、どんな魅力があるだろうか。草木が溢れ、空や星がきれいなところ、地域の祭りや古くから受け継がれている花祭り。五平もちやジビエなどのご当地料理。春は、ひらひらと舞う桜の花びらとうぐいすのさえずりを味わい、夏になれば澄んだ川で思う存分泳ぐ。少し肌寒い風が金木犀の香りを運んで秋の訪れを告げ、しんしんと降り積もる雪に胸が高鳴り、真っ白な景色を堪能する冬。四季を直に感じることでできるのも、田舎ならではの素敵だと思ふ。

この小説の登場人物は皆、極楽温泉町を愛し、故郷

の活性化を心から願っている。そして、願うばかりではなく、ひとりひとりが町に貢献している。私は、東栄町のために何ができるだろうか。現時点では、芳樹のように地域のイベントに参加することが精一杯かもしれない。それでも、東栄町の魅力をもっと多くの人に伝えたいと強く思う。いつまでも、私の誇れる故郷であってほしい。そして、私も町に貢献できる人間になりたい。

書名 「チームFについて」
著者 あさのあつこ

